

高校英語科における4技能を動機付ける文学的教材としての洋楽の導入

—洋楽の選択と4技能の効果へのSCQRMによる質的分析—

漆畑 祐佳

1. はじめに

IT化やグローバル化される社会の中で、今や高校生にとって洋楽は、スマートフォンからもアクセスしやすい身近な存在となってきた。英語の授業で洋楽の導入をしてきたが、生徒の学びに手応えがあると教師として感触を得てきたものの、具体的に知る手がかりがなかった。この度、平成30年度において、高校英語の授業に1年間帯授業として導入した20曲の洋楽について、4技能を動機づける文学的教材としての生徒の質的な学びを探るため、教師の振り返りや生徒のアンケート調査を行った。具体的な目的は以下の3つである。1つ目は、洋楽の選択理由について、生徒の質問紙調査と教師の振り返りから、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて質的に分析し、教師の洋楽の採用方法を省みる。2つ目に、高校生にとって、4技能を動機付ける教材としての洋楽から得られた学びを、構造構成的質的研究法SCQRMにより、理論としてモデル図を作成し視覚化する。3つ目に、洋楽の文学教材としての可能性について考察する。

2. 先行研究

洋楽を導入した中学校の英語の授業について、大学生からのアンケートを基に報告したAihara (2006) は、洋楽の使い方とその教材としての授業実践の方法を考察している。大学の英語の授業で、リスニングに特化して、洋楽を用いた授業実践報告には、階戸 (2014) がある。更に、教育的価値を高める教材としての洋楽とともに、大学の英語の授業での様々な活動を紹介し、洋楽を導入するにあたり肯定的なアンケート結果を報告したLaskowski (1995) がある。洋楽を文学教材として用いた論文には、日本の大学で文学教材を背景知識として英語教育に用いた実践研究論文である寺西・那須 (2013) 及び Teranishi & Nasu (2016) があり、洋楽の歌詞から比喩を探す方法が授業の導入で活用されている。

3. 研究方法

本稿では、高校での英語の授業において、洋楽を、4技能を動機付けるための文学的教材として、生徒の学びをSCQRMのモデル図により視覚化し、分析と考察を行う。高校普通科1年生におけるコミュニケーション英語I(4単位)の2クラス(39人及び38人)において、1年間にわたり帯活動として、20曲の洋楽を導入した。新しい洋楽を導入する初回の授業に、歌詞のプリントを配布し、不明な単語を丸で囲みながら歌詞を聴いていった。次の2分間でその単語を辞書で引き、生徒は平均して7つの単語を引くことができた。続けて、クラス全体で洋楽を歌った。洋楽の導入が惰性に流れないように、歌詞の意味内容や文法事項に関する質問などを生徒に随時投げかけた。1、2週間毎に、新しい洋楽を導入した。1学期、2学期の終わりに、好きな曲を3曲生徒に選んでもらい、その根拠を日本語で回答する予備アンケート調査を実施し、高校生の好きな洋楽の判断理由を探った。3学期には、1年間を通じて好きな洋楽を3曲選び、その根拠を選択式で選ぶ年度末アンケートを実施し、さらに、洋楽による英語の4技能における学びについて、自由記述によるアンケートを行った。

4. 予備アンケート結果に基づく洋楽の選択

教師の洋楽の採用及び活用方法を考察するため、生徒の予備アンケートと教師の振り返りから、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて、質的に分析した。修正版の方が切片化を簡略し、データから概念を直接作り上げることができるので、生徒の生きた声が反映されていると考えた。結果は、以下の通りである。1学期の終わりに、「好きな曲を3つ選び、その理由を書きなさい」という質問の結果、7曲中の1位は、The Chainsmokersの*Something Just Like This* (23票)、2位は、RADWIMPSの*Sparkle* (19票)であった。2学期における1位は、ONE OK ROCKの*Change* (30票)、2位は、Avril Lavigneの*Head Above Water* (12票)であった。1学期及び2学期に聴いた洋楽のうち、選択理由として票の多かった項目は、1位が「歌詞がいい」(95票)、2位は「もともと知っている」(90票)、3位が「歌いやすい」(61票)、4位が「リズム・テンポがいい」(10票)であった。年度末洋楽アンケートは、予備アンケートから得られた項目を選択式として作成した。3学期に使用した洋楽を加え、年間を通じての洋楽のうち好きな曲を3つ選び、その理由を選択式とした。上位4曲は、1

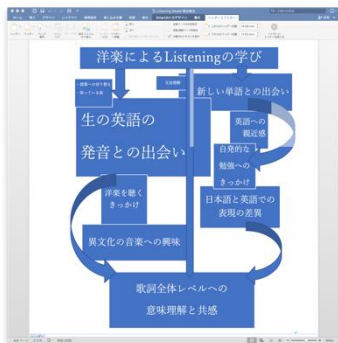
位が、ONE OK ROCK の *Change* (25 票)、2 位が Panic! at the Disco の *High Hopes* (24 票)、3 位が RADWIMPS の *Sparkle* (23 票)、4 位が Ariana Grande の *7 Rings* (19 票)であった。年度末アンケートでは、予備アンケートの結果とは項目の順位が入れ替わった。選択理由 1 位の項目が「テンポ・リズムがいい」、2 位は「歌詞がいい」、同数 2 位は「歌いやすい」、4 位は「曲調」、5 位は「もともと知っている」、6 位は「歌手が好きだった」となった。選択理由の項目を把握でき、生徒好みの洋楽を探るためのアンケートの基盤が得られた。

教師の振り返りは、採用した洋楽を Reflection Journal (Farrell, 2013)として、採用理由の省察項目を付け、記録した。1 位の *Change* の採用理由は、CM で使用され、*Change* して成長しようと呼びかける前向きな歌詞が受け入れられると考えた。2 位の *High Hopes* は、ビルボード 4 位のヒット曲であった。3 位の *Sparkle* は、映画「君の名は」のサウンドトラックからシングルカットされた曲の英語版なので、生徒の多くはすでに日本語版を耳にしていると考えた。4 位の *7 Rings* は、授業で導入した時期にビルボードで 1 位を記録したので、生徒は最もヒットしている曲との同時代性を意識できると考えた。洋楽の選択に留意すべき具体的な点は、映画や CM など使われ認知度が高い曲、ビルボードにチャートインしたヒット曲、歌詞の内容が過激でなく生きることへの積極的なメッセージがあるもの、イディオムや語彙、構文などが英検準 2 級レベル程度のもの、Bob Dylan などの古典的な曲、女性ボーカル及び男性ボーカルの曲を同数採用することが教師の振り返りから分析された。

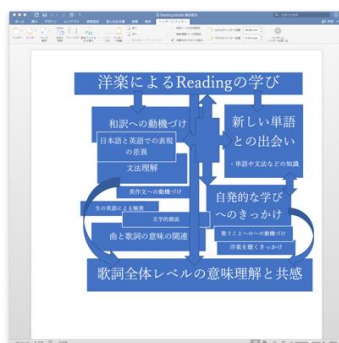
5. 構造構成的質的研究法 SCQRM による理論としてのモデル図作成

洋楽を導入して、どんな質的な学びがあるのか、英語の 4 技能別に分析した。洋楽を導入する際、生徒の受動性や惰性を避けるため、**Reading** では、歌詞の内容を理解しながら歌ったり、歌詞の内容について説明したり、質問したりする活動を加えた。**Speaking** では、洋楽を歌うことは、英語を発音し、アウトプットすることであるが、簡単な質問をし合うペアワークを導入したので、さらに **Interaction** の項目を設けることにした。**Writing** では、洋楽の歌詞を真似して、英語で詩を書くクリエイティブ・ライティングを導入した。年度末の生徒へのアンケート時間は 10 分で、それぞれの分野で、どのような学びがあったのか自由に記述してもらった。生徒の記述内容をテキスト化し、切片化し、分析ワークシートから構成概念を抽出した。概念項目は棒グラフにして数値化し、それを基に傾斜を掛け、以下の通り、理論として 5 つのモデル図を作成した。

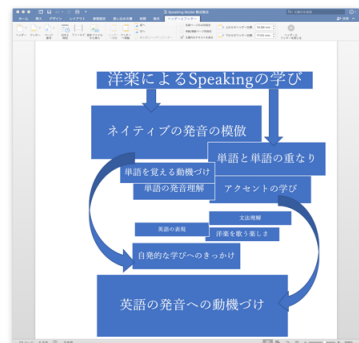
Listening のモデル図



Reading のモデル図



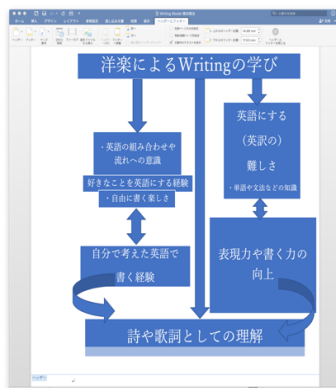
Speaking のモデル図



Interaction のモデル図



Writing のモデル図



6. 文学的教材としての洋楽

SCQRM のモデル図によると、共感性と歌詞あるいは詩としてのジャンルの認識が多く指摘されていた。Listening のモデル図では、歌詞の解説の際、比喩や韻を踏むことなどを解説したので、歌詞としてのジャンル全体への意味理解と、共感の学びが2番目の項目(11票)として多かった。Reading のモデル図からも、単語を調べたり、和訳したりする自発的な学びへのきっかけとともに、歌詞全体レベルへの意味理解と共感の学びが21票と最も多かった。Writing のモデル図からは、歌詞を真似して、詩や歌詞を書いてみるというクリエイティブ・ライティングの活動を行ったので、詩というもののジャンルについて文学的な認識を深めた生徒が18票と最も多いことが分かった。洋楽の導入の仕方、生徒が文学的に意識することが可能であると判明した。

7. まとめ

本研究は、高校で英語の授業を行う教師自身による実証研究である。教師はテストなどでは測定できない現象としての質的な学びを、経験を蓄積させた直観に頼り、把握しがちである。SCQRM によって得られた5種類のモデル図により、1年間に20曲の洋楽を帯授業で導入した際の、生徒にとって得られた学びが質的に視覚化された。洋楽の選択についても、生徒の選択理由の項目においてアンケートでは選択式が可能となり、教師自身の洋楽の選択が妥当なものであったのかを振り返る客観的な判断基準が築かれた。

各高校で作成されるCAN-DOリストが、CEFRに基づきトップダウン形式に作り上げているのに対し、SCQRM のモデル図は、生徒のより率直な声から、実際の学びがボトムアップ式に反映されたものと解釈できる。さらに、これら5つのモデル図には、洋楽の導入の学びに傾斜を掛け、視覚化されているので、教師の主観的な判断に委ねられるCAN-DOリストの内部達成率における照合の裏付けになるとも考えられる。

今後、指導要領の改訂に関連した「主体的・対話的で深い学び」に、具体的にどう根ざしていくのかという側面においても、オーセンティックで文学的教材としての洋楽を、質的に、そして有効に関連させ、生徒の反応を軸として、実証研究を行っていきたい。

参考文献

- 英語4技能資格・検定試験懇談会(2016)「資格・検定試験 CEFR との対照表」『英語4技能試験情報サイト』
http://4skills.eiken.or.jp/qualification/comparison_cefr.html
- 木下康仁(2007)「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)の分析方法」『富山大学看護学会誌』第6巻、第2号
- 戈木クレイグヒル滋子(2016)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ 改訂版 理論を生み出すまで』東京：新曜社
- 西条剛央(2007)「ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM ベーシック編」東京：新曜社
- 西条剛央(2008)「ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM アドバンス編」東京：新曜社
- 階戸陽太(2014)「洋楽を用いたディクテーションとプレゼンテーションを組み合わせたリスニングの実践：協同学習を取り入れた授業の中で(実践報告・調査報告、第43回中部地区英語教育学会富山大会)『中部地区英語教育学会紀要』第43号、213-220
- 寺西雅之・那須雅子(2013)「文学力を表現力へ—詩と俳句を教材として—」吉村俊子他(編)『文学教材実践ハンドブック 東京：英宝社
- 投野由紀夫編(2013)『英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』東京：大修館書店
- 文部科学省(2016)「高大接続改革の進捗状況について」(最終閲覧日2019年5月2日)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/05/_icsFiles/afieldfile/2017/05/16/1385793_01.pdf
- Aihara, K. (2006). Improving English skills through Songs 『茨城キリスト教大学紀要』第40号、1-12.
- Farrell, T. S. C. (2013). *Reflective Writing for Language Teachers*. UK/USA: Equinox.
- Laskowski, T. (1995). Using Songs in The Classroom: Enhancing Their Educational Value. *The Japan Society of English Language Education*, 6, 53-62.
- Teranishi, M. & Nasu, M. (2016). Literature and the role of background knowledge for EFL learners. In M. Burke, O. Fialho and S. Zyngier (Eds.), *Scientific Approaches to Literature I Learning Environments*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Teranishi, M., Saito, Y., & Wales, K. (Eds.) (2015). *Literature and Language Learning in the EFL Classroom*. UK: Palgrave Macmillan.